

多雪地帯で生まれた みずみずしく甘い越冬ニンジン

後志管内真狩村 JAようてい人参生産組合



ユリ根の産地として知られる真狩村では、深い雪をかぶり、土の中で熟成させる「越冬ニンジン」が生産されている。おいしさの理由や付加価値を高める工夫を、生産者に聞いた。

壺峰、羊蹄山を眼前に望む真狩村。JAようてい人参生産組合の組合長を務める大西一仁さん(49)の畑では、ニンジンが根雪を待っている。雪の下で越冬したニンジンはうまみ・甘みが強く感じられ、春先に出荷される「越冬ニンジン」は、農家の貴重な収入源となる。「ゴマ油で炒め、卵とじにすると絶品だね。うちの子どもたちは、スティックにした生のニンジンが大好き。パートのおばさんの中には、規格外のものを100キロ単位で持ち帰り、ジュースにする人もいますよ」

と、大西さんが笑顔で話す。

切り花のユリを主体に、ジャガイモやビート、大根、豆類など、55ヘクタールを作る大規模農家。ニンジンは3ヘクタールあり、このうち1ヘクタールが越冬ニンジンだ。栽培を始めて20年余りになる。

母の恵美子さん(71)の得意料理は、ニンジンとビートのかき揚げ。15年ほど前、知人からビートの天ぷらがおいしいと聞き、考案した。

「ビートは自然のまろやかな甘さがあり、彩りにニンジンを入れたら味がとても良くなったの。孫は2人とも、これが大好物なんですよ」

大西さん一家の食卓に、ニンジンは欠かせない。とりわけ、越冬ニンジンはおいしいと、太鼓判を押す。



多雪がもたらす大自然の恵み

JAようてい管内でニンジンを栽培する農家は180戸、作付面積は350ヘクタールにのぼる。うち越冬ニンジンの面積は1割を占め、真狩村の約50戸が手がける。道内で、畑に植えた状態で越冬させる生食用ニンジン産地は、真狩だけだ。

「ここ数年は市況も良く、農家の生産意欲が高まっている。秋ニンジンも並行して栽培する人が大半ですが、越冬専門の農家も数戸あります」

と、JA ようてい 営農販売事業本部 青果課 係長の西海英樹さんが説明する。

越冬ニンジンの生産は、昭和 50 年ごろに真狩村の豊川地区で始まった。たまたま秋に収穫できなかったニンジンで、春先に掘り出し出荷してみると、「これはおいしい！」と市場で評判に。春先の貴重な収入源になるため、村内全域に広がった。

生産組合長の大西さんは 25 年ほど前、大学を卒業後に就農。地元の 4 H クラブでニンジンの栽培試験をしたのがきっかけで、越冬ニンジンを作り続ける。値段が振るわず中断した時期もあったが、今では経営の柱の一つになっている。

組合員が栽培するのは、中早生種の『紅あかり』。収穫適期が長く収量があり、病気にも強い品種だ。

秋ニンジンより遅い 6 月下旬から 7 月上旬にかけて播種し、八月中旬には培土作業をする。栽培のコツは、雪が降るまで緑色の葉を維持すること。適切な防除を心がけている。冬季の積雪量は 1.5 メートルに達し、分厚い雪の布団をかぶって、ニンジンはおいしさを増す。

「ここは火山灰土壌で、越冬ものの長イモやゴボウもある。羊蹄山が我々に恵みをもたらしてくれます。ここは雪を生かした農業ができる土地なんですよ」

と、大西さんが力を込める。

ユリ根とともに ようていブランドを支える



越冬ニンジンの収穫作業は、とても手間がかかる。

3 月中旬ごろ、1 メートルほどの雪をパワーショベルで取り除く。ニンジンが凍結しないよう 10 センチほど雪を残し、最初はスコップで雪をはねながら、1 本ずつ抜き取る。4 月に入り暖かくなると、リフターと呼ばれる機械でニンジンを浮かし、ポテトディガーを使って掘り出す。その後、葉の部分を切り取り、コンテナに入れて JA の選別施設に出荷する。個選で対応する組合員もいる。

各組合員の越冬ニンジン作付面積は、平均 60～70 アール。10 アールの生産高は 30 万円前後で、秋ニンジンの 1.5 倍になる。一人で 1 日 3 アール前後しか収穫できないので、人手

のいる作業だ。

多くの組合員は、特産品として人気が高いユリ根も栽培する。12月まではユリ根、翌春は越冬ニンジンで収入を得られる。かつては他県産と出荷時期が競合して低迷した時機もあったが、今では価格も安定し、生産意欲も高まっているという。

「みずみずしさと独特の甘みを感じることができる。そこが越冬ニンジンの魅力なんです」と、大西さんが自信を見せる。

生産組合では、5つある支部ごとに産地視察を実施。市場との情報交換や栽培品種の選定、個選の品質統一に向けた「目慣らし会」の開催などを、精力的に続けている。

農家を束ねてきた大西さんは、

「越冬ニンジンには長い歴史がある。栽培技術も高くなり、品質もいい。農家は雪を利用しながら収入が確保でき、JAは秋ニンジンと併せて“ようていブランド”として売り出せる。ずっと続けるべき作物だね」

と、屈託のない笑顔を見せた。

今年も真狩村の農家は、春のニンジン掘りを心待ちにする。

